

南北問題。地球上の北側に位置する先進国と南側に位置する開発途上国間の経済格差を表す用語である。この南北問題が今、形を変えて日本国内の懸念事項になろうとしている。地球温暖化に端を発する農業の南北格差問題だ。気候の影響を強く受けるコメ生産の現場もその一つである。

日本の平均気温は20世紀の間に1度以上上昇した。21世紀中にはさらに約1〜4度上昇するという予測結果も公表されている。降水

地球温暖化とコメの南北問題

されている。たとえば、高級ブランド米といえば新潟

産を代表とするコシヒカリであったが、最近では北海道産米の品質が格段に向上し、ブランド米の勢力図を書き換えつつあるようだ。

その一方で、九州や中国・四国産の1等米比率は年々落ちており、温暖化に伴う南北間の対照的な変化があらわれはじめています。

このような温暖化の影響は、米作農家の収益にも無視できない差異をもたらしている。最新の研究結果によれば、日本の平均気温が仮に今より3度上がると、

北日本では特に収量の向上により10%ほどの増収となるのに対して、北陸以西では品質の大幅な悪化により

しかし、これらの温暖化

対策は「南」のコメ生産の現状維持を念頭に置いたもので、収量や品質（とそれらに伴う収益）の向上を目指す方策とは言い難い。加えて、対策に伴い増えるであろう「南」の農家の費用負担を考慮しているのか疑問が残る。たとえば、水・

土壌管理の徹底は生産コストの増加を招く恐れがある。また、遅植えの結果、「北」の良質な早場米に市場シェアを奪われ収益を悪化させかねない。

つまり、現状の「全国画一的なコメの生産構造を変えない限り、たとえ何らかの温暖化対策を講じたとしても、南北の所得格差を是正することは容易でない。本家の南北問題においても、開発途上国の経済成長を促すためには、既存の古い経済構造を抜本的に改善することが肝要であるといわれている。

画一的な生産構造の 改変も視野に

量や積雪量などにも大きな変化が生じるようだ。

温暖化による米作への影響はすでに全国各地で報告



名古屋市立大学大学院
経済学研究科准教授

内田 真輔

10%以上の減収が見込まれるという。温暖化の進行によつて栽培適地が北へ移動することで、南北コメ農家の収入に格差が生じうるといふことだ。

もちろん、温暖化への対応策も現在同時進行中である。農林水産省は高温耐性をもった水稻品種の開発・普及を推進しているし、西

日本では品種の変更や作付け時期の後倒し（遅植え）、さらには水・土壌管理の徹底による高温回避・耐性型の栽培法が導入され始めて

日本の米作は、来る減反政策の廃止やTPPに伴うコメの輸入促進とも相まって、現在大きな転換期にある。変化の著しい今だからこそ、現状の生産構造にとらわれない、新しいコメ生産の形を考える絶好の機会であるともいえる。

この際、コメの生産は「北」に任せ、「南」は新しい気候条件に適応した作物への転換や農業からの脱却なども視野に入れた柔軟な戦略を取るべきなのかもしれない。

うちだ しんすけ 資源経済学。メリーランド大学Ph.D。
1978年生まれ。

